

授業中のスマートフォン使用に関する学生の意識

-私的使用の意識調査結果の速報-

Students' Attitudes Toward the Use of Mobile Devices in Class -Report on the Results of the Survey-

辰 島 裕 美
Tatsushima Yumi

目次

- 1 はじめに
- 2 簡易調査の方法と結果
 - 2-1 調査の目的
 - 2-2 調査の概要
 - 2-3 数値結果の速報
 - 2-4 自由記述の内容
- 3 調査結果の考察
- 4 むすびに

キーワード

スマートフォン, 授業, 大学生, SNS

1 はじめに

一般人の PC 利用が本格的にスタートする出来事として象徴的な Windows95 の発売から 30 年を経ようとしている。その頃から少し遅れて始まった情報教育は、情報化に伴い、年を経るごとに新たなトピックを指導に盛り込む必要がある。高等教育の現場において、筆者が数年前から方向性を変えたのが、スマートフォン(以下、スマホ)など個人デバイスの授業中の使用方針である。スマホは一種のコンピュータと言う考えから、当初、情報リテラシー系の授業では、スマホをどんどん利用するよう奨励していた。その後、若年層にも短期間に普及し、授業中に奨励しなくても使用のスキルに問題はなくなった。次第に、授業中のスマホ使用⁽¹⁾は、注意力が散漫になったり、実際に思考や作業が中断されたりして、私語と類似の弊害が見られるようになった。このため、近年、筆者の情報リテラシー系授業では、授業中のスマホ使用を基本的に禁止へと変更している。

様々な考えや理由により、それぞれ時と場合によって、使用の可否は分かれて当然である。大人としては若干微妙なラインにいる学生は、実際にどのように感じているのか調査した。授業中のスマホの使用は、周囲に少なからず迷惑であると感じている学生は 35.2%であった。本稿では、調査の結果について報告するものである。

2 簡易調査の方法と結果

2-1 調査の目的

この調査は、2024 年 10 月に実施した。短大 1 年次前期と後期に配当されている、「ICT 活用実習」および「プレゼンテーション」という必修科目を担当しており、前期の「ICT 活用実習」の中で授業中の個人デバイスの使用について、指導している。この時点では、アンデシュ・ハンセン著「スマホ脳」⁽²⁾を提示し、便利なものではあるが、弊害もあることを理解させた。

後期になり、学生との休み時間の雑談の中で、教員の多様な考えや対応について聞くことがあり、教員が思う以上に、多様な学生の思いがあることを知った。そこで、学生の率直な意見を聞き取って、結果を学生と共有することが必要であると考えた。

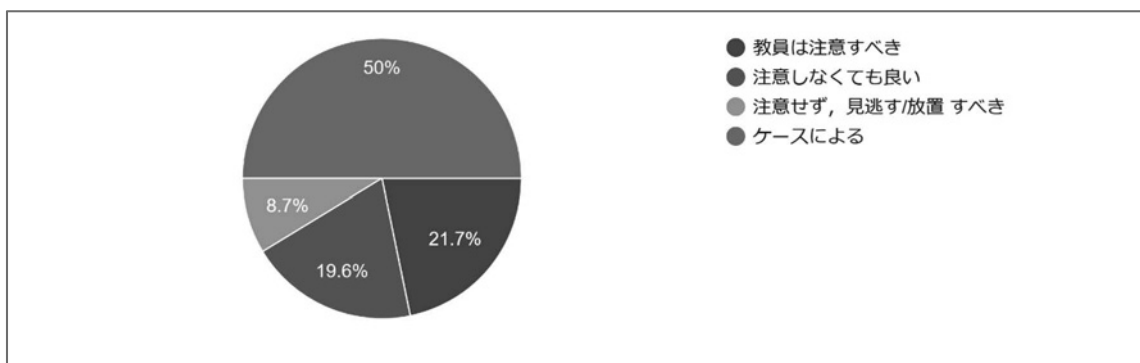
2-2 調査の概要

後期「プレゼンテーション」科目でも、授業中の学生の様子は、日々の授業の中で、LMS を利用して、情報収集を行っている。この時は、PC 操作に関する模擬テストの結果報告と同時に、スマホ使用に関する意見を収集する形で実施した。アンケートは記名である。

質問の項目として、「教員が授業中の私的スマホの使用を注意すべきかどうか」、「授業中の周囲に迷惑になるかどうか」といった 4 点について選択肢で回答を求め、最後に任意で自由意見の欄を設けた。選択肢で応える項目には授業に出席の 91 名が全員回答し、最後の自由に意見を記述する設問では、89 名が回答した。

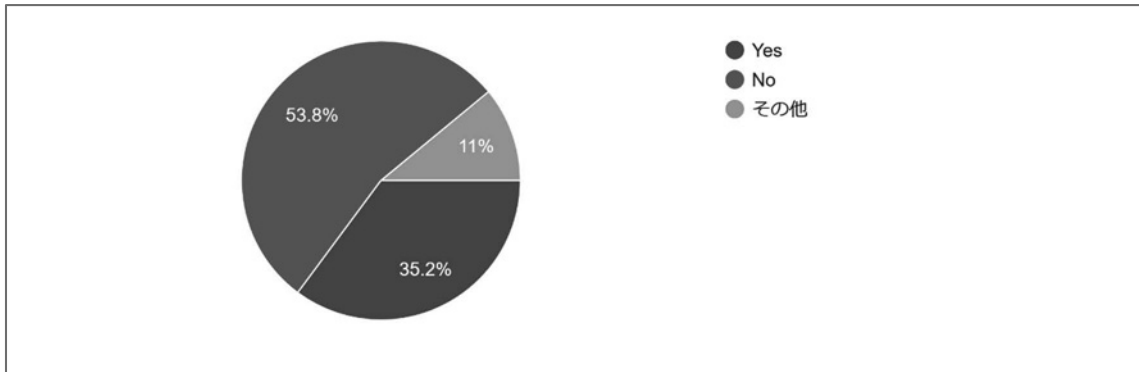
2-3 数値結果の速報

「プレゼンの授業に限り、教員は、注意をすべきでしょうか？ 自分の意見に一致/該当する項目にチェックください」という問いに、選択肢は 4 つで、結果は次の通りである。「教員は注意すべき」20 人 21.7%、「注意しなくても良い」18 人 19.6%、「注意せず、見逃す/放置 すべき」8 人 8.7%、「ケースによる」46 人 50.0%という数字であった。



グラフ 1：設問 1 結果

「スマホの私的使用は周囲に(クラスメイト)若干でも迷惑がかかる、あるいは、見ると不快に感じる」という問いに、選択肢は 3 つで、結果は次の通りである。「Yes」32 人 35.2%、「No」49 人 53.8%、「その他」10 人 11.0%という数字であった。



グラフ 2：設問 3 結果

2-4 自由記述の内容

全文字数は 6,905 文字、1 人平均 77.6 文字記述していることになる。2 名をのぞく 89 名が、何らかのコメントを記入している。ほとんどは、授業中のスマホの私的使用は、勉強が分からなくなり、評価に影響しても自己責任であるというものであった。「自己責任」の単語は 40 件の頻出である。前後の記述は、「授業についていけない/わからなくなる/学べない」11 件、「聞かない/聞き逃す」6 件、「使用/見る」4 件、「単位を落とす/成績が落ちる」4 件、「迷惑」が 3 件であった。

自己責任だから、「教員は注意しなくて良い」という意見もあるが、「自己責任でも、周りへの影響がある」から、「教員は注意すべき」という意見もある。

予想しなかった回答は、「スマホの私的使用は教員に対して失礼な行為である」という記述で、「失礼」という単語は 7 件あった。すべての「失礼」の言葉の前に「先生/教員」があり、中には「先生方」と言う記述もあった。礼儀正しい学生は少なからず存在し、それを記述したものである。当該科目の目標として、相手を思い配慮することを重ねて指導していることの関係かもしれない。

この調査は、本科目のみに関する回答を要求したものである。しかし、スマホの私的使用は、本科目だけではないようで、逆に教員が注意しない時間の迷惑について記述した学生も 4 名存在した。特に、音がするアプリや、一部で流行っている SNS はよくないなど、自己責任とはいえ、迷惑になっていることを訴える記述があった。代表例として、一部の記述を学生のことばのまま、図表 1 に掲載する。

また、自由な記述の内容と選択肢の回答との関連を目視で確認したが、教員が注意すべきであるという意見の学生と、注意しなくて良いとする学生の違いによる強い関連は、見られなかった。

- ・スマホを使っていたら、先生が話している重要な話を聞き逃すのでそれは自己責任だと思う。でも、自分がスマホをいじっていて話を聞き逃したのに、ちゃんとスマホをいじらずに話を聞いていた友達に「今、なんて言った？」と聞く人がいて、それはとてもイライラする。
- ・私は最近授業中に集中できなくて、私的にスマホを使っている自覚がある。やめたほうが良いことは知っている。しかし、注意してくれる人はなかなかおらず、自己責任なので辞（ママ）めるのは難しい。
- ・個人の責任だと思うので放置しておけばよいと思います。
- ・スマホを使っていて学べず、単位を落としてもそれは自己責任だと思う。だから、ちゃんと受けている人もいるため先生はわざわざ時間を止めてまで注意する必要はないと思う。
- ・スマホの使用は自己責任だと思うが、教員から指示を受けているのにもかかわらず使用することは、教員に対して失礼に値すると思う。たとえ自己責任であっても、周りに迷惑のかかるような使い方をしている場合は、早急にやめさせるべきだと思う。

図表 1：自由記述の一部

3 調査結果の考察

学生の意識として、スマホの私的使用は自由でよいとする一方で、迷惑に感じている学生の存在も明らかになった。私語と違ってうるさくないから、放置すればよいという意見と、直接的にも間接的にも影響があるという意見もあった。学生は大人なので自覚が必要、と言う考えと、自覚できない人がいるから教員が注意すべきという考えがあった。やはり、一つの事象に対して、意見は分かれる。授業中のスマホの私的使用は、私語ほどではないにしろ、周囲への影響はあり、迷惑だと感じている学生、教員が注意してほしいと思っている学生が存在した。このため、自分の考えだけで行動することの是非を考えさせる必要がある。

「迷惑だから教員が注意してほしい」という意見と「注意する時間が問題」という意見があった。これは、[スマホの私的使用]→[周囲への影響]→[教員の注意喚起]→[授業の中断]もしくは[注意喚起自体が不快]→ということになる。教員の注意の方法によっては、一部の不快が回避されても、別の不快が発生してくるということがわかった。

授業担当者としては、学生の心理的な現状は想定できる。一部の学生の、不快な発信源へのネガティブな思いは、迷惑なことをする人を先生が注意すべきである、という気持ちに教員が応えて注意することで緩和される。本来であれば、良くない行動を厳しく注意することが理にかなっている。しかし、大学生に対して、行動を禁止しても効果は一時的で高くはない。他方で、注意することに対して、そのこと自体に不愉快だと感じる学生も存在する。教員の板挟みの状況には、学生を大人扱いして自制心を促すことが一つの策であろう。さら

には、その場にいるすべての人を慮ることの重要性を理解させる「プレゼンテーション」という授業の特徴もあり、調査で得たデータを公開して、いろいろな立場や考え、感性を持つ人がいることを理解させることも学びである。多様な人の存在を知ることから、少なくとも人に迷惑になる行動をしない大人になることを期待したい。

4 むすびに

スマホや SNS の使用に限らず、インターネット依存は、深刻な問題であり⁽³⁾、前期から学生に指導していた。今回の調査では、スマホやインターネットへの依存との関連は調査していないが、依存的な状態で周囲への迷惑に気が付かない、あるいはそれでも依存しているケースもあり得る。また、デュアルタスクやマルチタスクといった、複数の作業を同時に行うことの研究結果では、脳の前頭前野がよく活動することと集中知力の低下が実験により明らかになっている⁽⁴⁾。また、このほど、自転車運転の「ながらスマホ」が道路交通法で規制された⁽⁵⁾。スマホ使用の弊害は、枚挙にいとまがないくらいである。

今回の調査では、学生に教員が注意することに賛成か反対かという質問を投げたことで、不快に思う学生の存在が明らかになり、周囲に迷惑をかけている実情を提示することで、自覚を促す材料を得ることができた。また、授業中という時間を、多面的に状況把握できた。全ての物事には両面が存在するが、大勢の学生のそれぞれの意識を共有することで、全体に良い方向へ導く可能性も認識できた。

注釈と参考文献

- (1)「スマートフォンを自由に使用しながら講義を受けることが学習者に与える影響ーインターネット依存との関係性ー」,宇宿公紀,教育システム情報学会研究報告 32(5),155-156, 2018,私的利用を含むスマホ利用をした学生、しなかった学生で授業理解度に差が見られなかったという結果報告
- (2)「スマホ脳」,アンデシュ・ハンセン,2020,新潮社
- (3)「『ついスマホをいじってしまう』逸脱状況アウェアネスの共有による作業復帰支援」山本航平,高島健太郎,西本一志,情報処理学会研究報告.HCI,ヒューマンコンピュータインタラクション,28),1-5,2020,“同調行為”という視点での実験において、他の人がスマホを触っていなければ自分も作業に集中する、という結果を報告
- (4)「スマホが学力を破壊する」,川島隆太,2018, 集英社,第 7 章「勉強中のスマホ使用の実態」大学生と大学院生を対象にスマホの着信音による集中力の低下を問題視
- (5)「政府広報オンライン」,内閣府大臣官房政府広報室,
<https://www.gov-online.go.jp/article/202410/entry-6604.html> (2024,11,25)